

やまたらけ

YAMADARAKE

YAMADARAKE JANUARY 2023

99

物言わぬ石仏が語る歴史

早川集落のはずれに祀られている双体道祖神（左：天明元（1781）年）と六地藏（右：年不詳）。道祖神は、早川集落では「道ろく神」とも呼ばれ、1月14日の小正月にお祭りが行われる。

上流研の取り組みを応援して頂いています！

毎分 1,630ℓ 湯温 52℃の掘削自噴火温泉では日本唯一を誇る新潟湧出
全てのお風呂、客室風呂、給湯、シャワーに至るまで 源泉掛け流し

全館源泉掛け流しの宿

西山温泉 慶雲館

〒409-2702
山梨県南巨摩郡早川町西山温泉
TEL 0556-48-2111
FAX 0556-48-2611 <http://www.kefunkan.co.jp>

hako.
cafe | design | incense

www.hako.studio

生命保険、損害保険のことなら
株式会社 さいとうエージェンシー
tel.055-280-3360 fax.055-280-3361

自動車販売、オートリース、レンタカーのことなら
有限会社 S・T・E・P
tel.055-280-3350

sun life

〒400-0422 山梨県南アルプス市荊沢 1356-1

「戦争」について、
家族・親子で考えてみませんか？

えくぼのかよちゃん

海老名香葉子 文 / 林家しん平 絵
定価1,320円（税込）

100年の笑顔・夢 100年先の未来も

ESTABLISHED IN 1919
金の星社 〒111-0056 東京都台東区小島1-4-3
TEL.03-3861-1861 FAX.03-3861-1507

地域発展のお手伝い！地域の暮らしを守る！

早邦建設株式会社

【本社】〒409-2732 山梨県南巨摩郡早川町高住 645-27
TEL.0556-45-3000 FAX.0556-45-2288
【生コンクリートプラント】TEL.0556-45-2700
<http://www.soho3000.com/>

日新火災海上保険 代理店
日新火災

幡野保険事務所

〒409-3306
山梨県南巨摩郡身延町夜子沢4020
TEL 090-8014-1337
FAX 0556-42-3073

南アルプス街道の交通安全と
清流早川の自然を守ることを永遠のテーマに
地域社会の発展に貢献する事を目指します。

早川砂利協同組合

山梨県南巨摩郡早川町小縄 26
電話 0556-45-2450

早川町で感動体験を・・・
南アルプス生態邑
光源の里温泉 ヘルシー美里
南アルプス邑野鳥公園

ご予約・お問い合わせ
TEL/0556-48-2621
<http://www.hayakawa-eco.com/hmisato/>

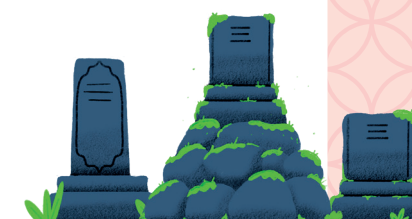
早川町特産品 観光 PR

早川町の魅力を東京で発信します！
～お気軽にお問い合わせください。～

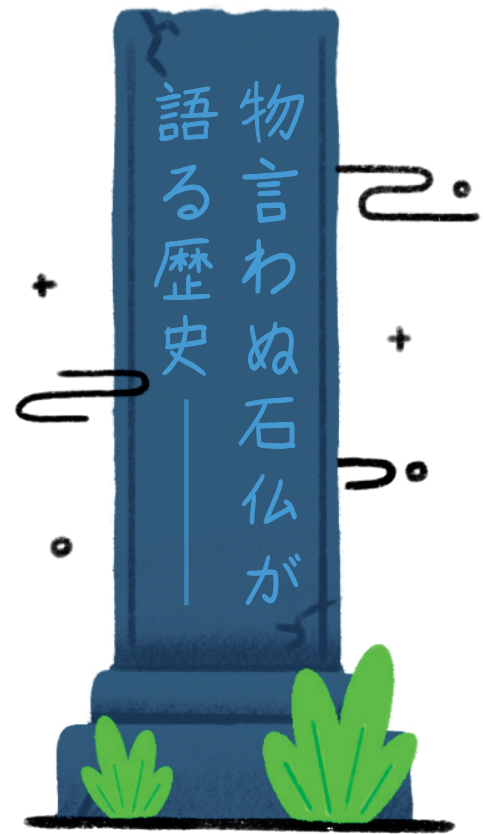
ANNIVERSARY CONCIERGE
アニバーサリーコンシェルジュ
TEL : 03-5823-4043



【編集後記】早川町には、たくさんの石造物が残されている。その前を通ると、ついつい手を合わせてしまう。それは、石造物を通して長い年月にわたって伝えられてきた歴史、先人たちの思いが頭をよぎるからだろうか。今号は、三里地区の歴史、石造物に詳しい山村さんがわかりやすく解説してくださっている。読み応えのある一種の歴史物である。



発行元 / NPO 法人日本上流文化圏研究所
住所 / 山梨県南巨摩郡早川町薬袋 430
t: 0556-45-2160 f: 0556-45-2268
www.joryuken.net



皆さんは、自分が暮らす地域の歴史に興味はありますか？身近な地域の歴史は、教科書や本に載っていないことが多いですが、いろいろな方法で知ることができます。昔のことをよく知っているお年寄りに話を聞いたり、古文書を読んだり。ほかにも、残されている「モノ」に注目してみると、歴史がわかることもあるのです。

今回の『やまだらけ』では、そんな風に集落内に残された「モノ」である石造物を通して、早川流域、特に三里地区の歴史を辿ってみたいと思います。案内人は、新倉郷土研究会のメンバーでもある、居村道夫さん。文化財審議委員として石造物の調査を始めました。ご自身の活動を通して石造物の魅力を伝え、それが刺激になって多くの人に興味を持って頂ければという想いの元で活動されています。

さて、長い年月伝えられてきた石造物を通して、どんな歴史が明らかになるのでしょうか？



1

早川「武士墓場の石碑」は、町内最古の石造物か？

三里地区の百七十基余りの石造物中で、一つだけ飛びぬけて古いのがここに紹介する早川集落の石碑（墓石）である。これは当地区の人々には古

来より「武士墓場」と伝

えられてきた民話の場所であり、早川集落の下部、河岸段丘の崖の上に位置し、六〇年ほど以前までは土がこんもり盛り上がった塚と石碑が残っていたという。その後、道路の拡張にもなつて塚は消滅し、現在は道路沿いに石碑だけが残されている。

墓石の法量は縦五〇cm、横二〇cm、奥行一四cmと比較的小さく、自然石を加工した墓石で、正面に「南無妙法蓮華經」、背面には戒名とおもわれる「□□院□心日明世□□」を中心にその左右に「永享十戌午年」、「六月上旬五日」と彫られている。永享十年は室町時代中期の年号で、西暦一四三八年にあたり、早川町に残されている年代の判明している史料では、古文書類その他を含め現在のところおそらく最古のものである。これまでは京ヶ島・常昌院の阿弥陀如来像（町指定文化財）

の像底に書かれた銘文の明応十年（一五〇一）が最古であった。なお早川地区でこれに続く石碑は天明元年（一七八一）の五百遠忌塔（真妙寺）、双体道祖神（集落内）があり、年代はグンと新しくなる。

この墓跡について、早川集落に伝わる「武士墓場」という民話とは、

昔、早川と黒桂の草分けで、武士の流れをくむ両家は、何かにつけ対立することが多かった。ある時その対立は早川の流れを挟んで相対し、弓による力くらべにまで発展した。最初に強弓を射かけたのは黒桂からで、うなりを立てて飛んできた矢は、畑の中に立っていた早川の武士の胸板に突き刺さって倒れた。驚いたのは弓を射かけた方で、ただ力比べが目的で殺すつもりではなかったのが、夢中で川を渡り対岸にかけ上がった倒れている武士を抱き起こそうとした。とその瞬間倒れていた男は矢庭に腰の刀を抜き、黒桂の武士の胸元を突き刺した。一瞬にして黒桂の武士は、死んだのは黒桂の武士だった。ただ早川の武士とても故意にしたのではなく、武士の本能が相手の襲撃と勘違いしての行為であったのであろう。早



川の武士は自分の軽挙を悔い、せめて供養をとねんごろに菩提を弔ったといい、そこを武士墓場と呼んでいる。

・・・（早川町誌一六五〇ページより）

早川町誌によると、町内には縄文、弥生の遺跡は多数発見されているが、その後は戦国時代に至るまで、奈良王伝承をはじめとして各所にいろいろな言い伝えはあるものの、残念ながらそれを実証するその当時の遺構、遺物、書きものなどは一切残されておらず、いまのところ伝説の域をでるものではないとしている。従って早川流域の古代中世（奈良、平安、鎌倉、室町時代）の歴史は空白の時代ともいえる。とはいえ、痕跡がないからと言って、戦国期以前から流域に生活していたであろう早川の先住民の存在を全く否定することもできないのである。そうしたなか今回はじめて室町時代中期に人が住みついていて証拠を早川集落で確認できたのは大きな収穫である。

なおこの「武士墓場の墓石」以降、この地域における石造物の空白も続き、再び出現するのは、それから二六〇年後の江戸時代中期まで待たなければならない。これは人家もまばらな中世の山村に生きる人々にとって、石造物を造ることの意義、またいかに技術と労力、

コラム 1 【三里地区の石造物の数と古さ】

三里地区＝旧三里村内には、寺社の境内を中心として現在百七十基余りの石造物（寺院の墓石を除く）が点在している。その種類は石灯籠、狛犬、石段、石橋、手洗石、題目塔、遠忌塔、念仏塔、万霊塔、

道祖神、馬頭観音、秋葉権現、牛頭天王、屋敷神、稲荷、水神、山神、天神、天宮、養蚕神、疫病神、弁財天、二十三夜塔、地藏尊、二宮金次郎像、慰霊塔、顕彰碑、記念碑など多種に及んでいる。このうち明治以前の石造物は、解読不能のものを含め約六十基、明治以降が百十基などとなっている。

集落ごとに一番古い石造物を見てみると、新倉は江戸中期の宝永元年（一七〇四）の題目塔（法善寺）と念仏塔（大抱院）が、茂倉には元禄十四年（一七〇一）の題目塔（七面堂）が、大原野には安永八年（一七七九）銘の題目塔が建長寺に残されている。ほとんどは江戸時代中期以降（一七〇〇年）に建立されたものである。



集落の片隅にある武士墓場。



「南無妙法蓮華經」と彫られた正面。



「永享 10 年」と彫られた背面。

居村さんに教わる注目ポイント

「永享 10 年」という年号に大注目！！伝説ではなく文字として町内に残る最も古い年代です。

「雨乞い」にも歌われた 新倉・内河内川の弁天様？



内河内川の河原。中央の松の木の根元に弁天様の祠がある。



弁天様の祠。

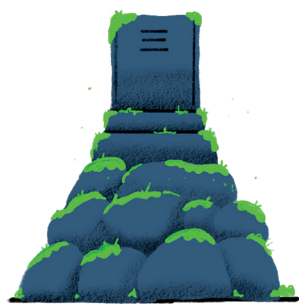


祠の真ん中の部分を、川に運んで洗い清めてから撮影。左が正面、右が背面。



国の天然記念物「新倉断層」を過ぎ、車道を内河内川上流に五〇〇Ｍほど進むと、その名も「弁天」と呼ばれる地域が広がっている。この地名は江戸時代前期の寛文十一年新倉村検地帳（一六七二）にはその名は見当たらない。しかし明治七年の地租改正による耕地再編後にはじめて「弁天」として耕地名が登録されているので、検地以降に新しくできた小字名であることがわかる。川の向かいには、現在リニアのトンネル掘削中の大堂見山が聳え、その山頂から流れ落ちる「横音の滝」も見える。車道のすぐ下には四〇年ほど前まで利用されていた旧道が所々に残っている。その旧道沿いにある大きい松の根元に写真のような「弁天様」を祀る石の祠がある。祠の正面には「辯天」とあり、背面には「大正□年十二月廿□兵衛」と彫られている。建立者が通常の地域名ではなく、個人名となっているので個人的な信仰に基づく建立と考えられる。

弁天様は正式には「弁財天」といい、七福神の一員でもある。もともとは古代インドのバラモン教の女神で「河の神」として祀った農業神であったが、のちに新しく興った仏教に採り入れられて音楽福徳、延命の仏とされる。また「水



茂倉の二十三夜塔



居村さんに教わる注目ポイント

もとは1つの石碑でしたが、こんなふうに離れ離れに……。本来の姿に戻せるといいですね！

二十三夜塔の上下が離れて置かれている。



上（左写真）と下（右写真）に分かれてしまった二十三夜塔。茂倉集落の中心部、道祖神場に集められた石造物。

茂倉集落の中心にある道祖神場周辺には、集落内から集められた石造物の一群がある。その多数の中に、真ん中で上下に二つに割れて、離れ離れに置かれた二十三夜塔もある。上下を一つにして解読してみると、正面中央に「妙法蓮華経 二十三夜勢至菩薩」とあり、その向かって右側に「宝永六己丑年 當村中」、左側に「文政三庚辰年二月日再建立」と彫られている。勢至菩薩は阿弥陀三尊の一員で右脇侍を務め、また二十三夜信仰の本尊とされていた。

月待の碑である二十三夜塔は二十三日（旧暦）の夜、仲間が集まり、月の出を待って拝む信仰行事で、多くは講の形をとり、当日は当番の家に講仲間が集まり、念仏や題目を唱えたり、飲食しながら皆で語り合う。月待には十五夜、十七夜、十九夜、二十一夜、二十三夜、二十六夜などがあり、毎月、または決められた月などに行なうのが一般的であった。この中で特に盛んなのが二十三夜である。時代が経つにつれ、多くの場合が信仰よりも、次第に飲み食いを中心の行事になっていったという。なお茂倉の二十三夜塔には「妙法蓮華経」とあるので日蓮宗の妙法講と兼ねて行なわれたものとおもわれる。娯楽の少ない時代にあっ

て、茂倉でも当夜のお題目をあげたあとは、さぞかし、呑めや喰えとにぎやかなものであったことだろう。また、この石碑は宝永六己丑年（一七〇九）に建立された古い碑を、約百十年後の文政三庚辰年（一八二〇）に建て替えたものであり、講が大変古くから行なわれていたことがわかる。

このように私たちの周囲には、一つ一つに先人たちの思いがこもった石造物がたくさん残されており、まだまだ説明されていない早川流域の歴史もあります。孔子は論語のなかで「温故知新」（古きを尋ねて新しきを知る）と教えています。町民の皆様も今まで見過ごしていた地域の石碑、石仏、石祠にもぜひ関心を寄せられ、歴史史料（文化財）の保存継承にご協力をいただきたいとおもいます。（居村道夫）

コラム 2

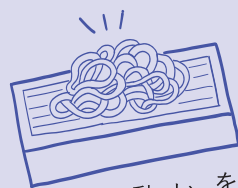
【用語解説】

検地帳：課税のために、村ごとに作成された台帳。農地の「場所（字や小字など）」「面積」「農地の区分（畑か田んぼか・生産力の高いか低いかなどで決まる）」「納税責任者」などが記載されている。検地帳を見ると、当時の詳細な地名や、農業生産の様子などがわかる。

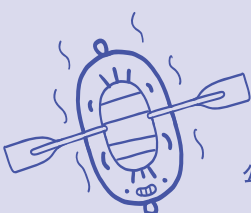
【参考文献】

- ① 早川町誌・早川町教育委員会
- ② 甲府の石造物・甲府市教育委員会
- ③ 石仏調査ハンドブック・雄山閣

十千十二支：「茂倉の二十三夜塔」に登場する石碑の、元号（「宝永」「文政」と年（六、三）の次に書かれている「己丑」「庚辰」という語句は、その年の「干支」を表す。現在、干支というと、「十二支」を指すことが多いが、本来はこれに「十干」が組み合わさり、「〇〇子」「××卯」などとなる。干支は、改元などがあってもリセットされることなく現代まで続いていて、己丑も庚辰も六十年に一度やってきている。ちなみに、最近の己丑は二〇〇九年、庚辰は二〇〇〇年だった。阿弥陀三尊・脇侍：仏像は、「三尊形式」で祀られることが多い。メインの仏様を真ん中に、その左右に、「脇侍」と呼ぶお付きの仏様を安置するのである。阿弥陀三尊の場合は、阿弥陀如来像が中央で、観音菩薩と勢至菩薩が左右を固めることが多い。



公開審査会。各団体が、自分のやる気をアピール。



公開審査会。各団体が、自分のやる気をアピール。



保の神楽講は、移住者とともに神楽を伝承。

やまだらけ定期購読のお願い

「やまだらけ」の発行は広告料と会員の皆様の会費で成り立っています。会員として、この取り組みを支えてください。

会員の皆様には、「やまだらけ」を毎号お届けいたします。今後も「山の暮らしの価値」と、それを後世に守り伝える人々の活動をお伝えして参ります。

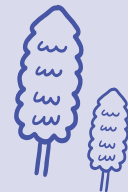
- 【年会費】 正会員：10,000 円
賛助会員：3,000 円
- 【振込先】 ゆうちょ銀行 ○二九店
当座 0095644
- 【名義人】 特定非営利活動法人
日本上流文化圏研究所

「人が集まり生まれる力」

ついに『やまだらけ』が100号を迎えます！100号となる次号では、人が集まることによって生まれるパワーに注目します。人と人とのつながりは、早川町の魅力の一つ。コロナ禍で「集まること」が「当たり前」ではなくなったからこそ、改めて人が集まることの大切さ・力強さを考えてみたいと思います。合わせて、100号を記念する企画もお届けします。お楽しみに！



赤沢のそば処武蔵屋。助成期間終了後、自分たちで空き家を借り、店舗に改装。そば屋開店の目標を実現させた。



特別企画 鳥の目 虫の目

平成15年（2003）に発行を始めた『やまだらけ』。まもなく迎える100号の節目まで、上流研のこれまでの取り組みを6回に渡って振り返る本企画も、いよいよ最終回となりました。

その
06

「あなたのやる気応援事業」



休耕田をブルーベリー畑に変える作業をしている千須和主導会。



Ya! Tea 倶楽部が作った、雨畑茶を使った紅茶。



野鳥公園で、自然観察プログラムについて打ち合わせ。



作り出すような動きもある。

助成の対象となった団体はおよそ30にのぼる。活動の一例を挙げると、赤沢のそば処武蔵屋の開店準備、遊休農地を利用したブルーベリー農園づくり、茂倉うりの保存継承、ラフティング（川下り）のための拠点整備、獅子舞の保存継承、手作りおもちゃや昔の遊びの伝承などなど。活動内容としては、早川町の産物を利用した商品開発や、自然や文化の体験プログラムの構築や充実

本連載のトリを飾るのは、この『やまだらけ』の発行とも縁の深い、「あなたのやる気応援事業」（以下、「やる気事業」）。これは、その名の通り、町民のチャレンジを後押しする助成事業で、2002年から2015年度まで実施していた。「こんなことやりたい！」と思った町民に企画を出してもらい、それを審査して資金を助成。その際、早川町の地域づくりを応援してくれる町内外の「早川サポーターズクラブ」の会員の皆さんから集めた資金の一部を充てる。町民の活動によって早川町の魅力を高めることが、サポーターズクラブ会員への還元となるという仕組みだ。そして、『やまだらけ』は、もともと、サポーターズクラブ会員と地域をつなぐ情報誌と位置づけられていたのである。